

特集

第4回北海道自殺予防フォーラム～ひとりでも多くの命を救うために～

平成21年9月6日（日）北海道、札幌市の主催により「第4回北海道自殺予防フォーラム～ひとりでも多くの命を救うために～」を札幌市教育文化会館において開催しました。

今年は、基調講演に和歌山県のNPO法人白浜レスキューネットワーク代表の藤藪庸一氏をお迎えし、その活動についてお話を伺いました。

白浜レスキューネットワークでは、白浜三段壁に「いのちの電話」の看板を設置し、電話がくれば駆けつけ、呼びかけ、手をさしのべ、生活の場を提供し、人のつながりを築いていく活動を行っています。

また、パネルディスカッションでは昨年に引き続き、身近な人を自死でなくされうつ状態になられた方や自殺を試みた結果一命を取り留めた方など、こころの危機を経験された当事者の方の貴重なお話しが聞ける機会となりました。

こころからの支援者が、こころの危機を経験した当事者が、それぞれ自身の言葉で語ることで、たくさんの人に伝わる思いがあります。

このフォーラムを開催することで、自殺を取り巻く現状をたくさんの人に知ってもらい、誰にでも、誰の周りにでも起こりうる決して遠くの問題ではないことを知り、また、ひとりひとりにできることは何かを考えていただく機会になりました。

（保健福祉推進部 鹿野 なほみ）

基調講演

ひとりでも多くの命を救うために～現場からみる自殺予防対策

白浜レスキューネットワーク代表 藤藪 庸一氏

藤藪先生は1999年に白浜レスキューネットワークの活動を引継ぎ、2006年にNPO法人を設立されました。現在、心身の回復を目指す生活自立支援活動や、人が自殺に至らない社会づくり、人づくりに取り組んでいらっしゃいます。

今回はこの講演を要約し、紹介させていただきます。

白浜町をどのようにしていくか、そんなことを考えながら日々を過ごしています。私のそういう思いも含めて皆さんに伝わればいいなあと考えて今日来させていただきました。

わたしが保護した20代の女性の話をします。彼女は2歳の子供を抱え、おなかの中にも子どもがいました。一人目のご主人との間に2人の子ども、二人目のご主人との間にも2人の子ども、同棲していた新しい男性との間にも3人の子供が生まれる。

彼女は小さいときから親と暮らした経験がなく、養護施設で育ち、そういう環境になじめなくて中学も不登校気味で社会に飛び出したのです。彼女は味わってこなかったのです。親になるために味あわなければならなかった家庭とか、親の愛情とか、そういった必要不可欠なものを欠いたまま二十歳を超えてしまっているのです。そして自分を保護してくれる男性を求めてこのような状況まで来てしまった。その人のその彼女だけの問題と言えるでしょうか。その生き方は間違っていると言わなければいけない。でも責めきれない。育てられてないから、味わってないからです。自殺に至ってしまう大きな原因の1つとして、育っていく環境の中のその大切さ。幼少期から本当にこの義務教育期間が終わるくらいまでの間、どういうふう育てられたか、人と関わってきたのか、どういうふう人が関わってくれたか、それがものすごく大事だと改めて私は感じるのです。

私は10年ほど前には年間大体40人ほど保護していました。しかしその10年前48歳くらいの男性に会うことがわかったのです。4年前には約30人を保護しましたが大体55歳前後の男性に会うことがわかった。最近では男性、女性関係なくて、60歳以上の年配者が目立つようになってきました。この3月からは状況が変わりました。なんとこの半年で60人を超えました。目立つのは30代、40代、皆仕事盛り、それから住む場所がない、それほど借金があるわけでもない、完全に自分の生きていく環境を無くした人たちでした。この3月から三段壁でも派遣切りと呼ばれる状況になってしまった人がどっと増えました。今までにないペースです。

私たちの活動は1979年から始まりました。30年間で約1000人に達しようとしています。多いのか少ないのかわかりませんが、ほとんど白浜町以外のところからやってくる。白浜町は自分たちの住人

外の人たちのため予算を割かなければならない。ちょっと待てよと思う一人がいるはずなのです。しかし、全体的に私たちは白浜町は、今この活動を通してひとつになっているのです。今現在、うちでは16人が一緒に生活しています。一夜明けると、1人増え、2人増え、そしてそれがずっと近所に住む。近所の人たちはそれを許して見守ってくれようとしている。白浜町もどっちかという何か援助できないかと考えてくれている。

三段壁では年間約百人の人が訪れる。殆どの関わりがこの電話から始まります。第1段階が電話での相談。しかしよほどの確信がないと電話では終われないので、第2段階、場所を聞き出して会いに行きます。時間が勝負と思って急ぎます。軽トラックに乗せ話を聞きます。大丈夫と思ったら駅に送ったり、帰る場所まで送ったりします。まだ心配の残るのは第3段階です。事務所のところにある部屋で1泊か2泊してもらいます。家族や共同生活者と一緒に食事をとって興奮が冷めるのを待ちます。帰る意志ができ次第、受け入れ先と連絡をとって送り出したり迎えに来てもらったりしています。そして帰る場所がない場合が第4段階です。長期滞在も覚悟して、白浜でやり直すことも考えます。はじめはゆっくり食べて休養する。少しずつ今後のことについて話をしていきます。方針が固まったら具体的に動き出します。就職活動、自己破産、必要があれば精神科治療など、どうすればやり直せるのかともに考えていく、それが私のスタンスです。

助けを求めているのにその声をあげられない人が1人孤独な中で死んでいく、それが自殺です。声をあげられないのであれば、聞いてあげる必要があると思います。話せるようにしてあげる必要があると思うのです。

9年ほど前にきた65歳の男性は死ぬことだけを考えて3日間三段壁で座り続け、四日目の夜、観光客と思われる若い女の子たちが前を通り過ぎていきました。1人の女の子が戻ってきて彼に二千円を手渡して「馬鹿なこと考えたらあかんよ死んだらあかんよ」って言ったそうです。彼はそのお金でご飯を食べて電話をかけてきたそうです。彼は一生忘れない。彼は肝臓ガンです。もう長くはない。そして、私とやってきた9年間本当に良かったなあって思っているのです。彼の死の淵で思いとどませたのは、ただ一度声をかけて、できる範囲の助けを差し出した勇気だったと思います。この活動を始めた頃は人を助けるためには経済的に自立させることだと思っていました。今はそれも必要だと認めながら、その人が自分の尊厳を失わないで生きていける生きていける道、生き方、それをどうやって見つけていけるか、たどりつけるかすごく大事なことだと思っています。

白浜では、この2月から白浜町が主体となってパトロールが行われます。言い出しっぺは白浜町です。県の職員も警察も参加します。一般市民もボランティアとして参加しはじめています。うちで生活しているメンバーも経験者として参加します。こういう輪が必要です。こういう輪で1人でも多くの人に手をさしのべられたらと思って私は活動を続けています。

「こころの危機を経験して今私にできること」

今回のパネルディスカッションでは「こころの危機を体験して今私にできること」というテーマで、深刻なこころの危機を体験された当事者3名の方に体験としてお話をいただきました。

最初のパネリストAさんはご自身の恵まれない境遇から覚醒剤を使用、刑務所、ホームレスを経験し、現在は仲間の自死という困難を乗り越え当事者カウンセリングの活動をおこなっている、という報告がなされました。次いでBさんは、父親の自死から鬱が悪化し、自分自身自死も考えたが交流会をとおして今後のご自身の生き方を考えられるようになったという報告がなされました。最後にCさんから、父が自死した後に生じた精神的混乱の中で、自らも自殺企図を体験したご本人が後遺症の身体障害を持ち、生きていく意味を失いかけたがカウンセリングを通して生きていく実感を回復し、今では就労を目指し学んでいることを報告されました。

その後のディスカッションの中では、それぞれに深刻なこころの危機を経験し、そこから立ち直る中で障害者の支援や自殺予防活動のために自分の体験を役立てたいと日々考えているということを発表されていました。

会場では、静かな中でも意味のある重い言葉を聞き逃さないという空気の中でのパネリストの真剣な発言に、フロアーからは感銘と暖かい拍手がよせられていたことを最後に報告させていただきます。

(保健福祉推進部 森本 俊二)